友愛と対話
――プラトン『リュシス』における友としての人――

宮　崎　文　典

論文要旨

本稿は、プラトン『リュシス』における友（φίλος）としての人がもつ意味を、特に友としての人の欲求と行為、またこれらと知との関係という点から検討するものである。ソクラテスとリュシスとの最初の対話（207d-210d）で語られる友としての人は、知者と思われることによって、有用なこともそうでないことも区別なく欲し、どんな欲求も無制限に充たしうるというものである。だが、こうした性格は、当対話篇中の以降の議論において、友としての人がもつべき欲求から悪しき欲求を除外するというかたちで修正されていく。そして、友としての人は、その人が欠いている知を愛し求めることをもとに、対話することを望み、おこなう人として捉えられる。こうした性格づけは、当対話篇で描かれるソクラテスと少年たち（リュシスとメネクセノス）との対話の実践のうちに示されている。こうして、無知を自覚し知を求める人同士の相互性のうちに、知を愛し求めること（φιλοσοφία）が見出される。

キーワード【ソクラテス、プラトン、『リュシス』、友愛、対話】

序

「知を愛する（愛し求める）人（哲学者 φιλόσοφος）」がいかなる存在であり、どのように位置づけられるかということは、プラトンの哲学における大きなテーマのひとつといえよう。また、この問題については、ソクラテスの対話活動との関連性を看過することはできない。こうした問題を念頭に置きつつ、本稿では『リュシス』[1)]において示される「友」としての人がもつ意味を検討してみたい。

『リュシス』において展開される一連の議論のことを、ソクラテスは「友愛について」（222d2）、あるいは「友について、それが何であるか」（222b5）、「友という人（φίλος）とは何であるか」（223b7）についての議論と述べている。こうした発言からすると、当対話篇の一連の議論は「友（あるいは友愛）とは何か」という定義を探求するもののようにみえる[2)]。しかし、Sedleyが指摘するように、一連の議論はむしろ「誰／何が、誰／何と友であるのか」を同定するという問題にかかわっているといえる[3)]。しかもこの場合、友であるという事態は、「愛する（φιλεῖν）」、「恋する（熱情、情欲を抱く ἐρᾶν）」、「欲する（ἐπιθυμεῖν）」、「求める（ἀγαπᾶν）」など、広く欲求にかかわる問題として議論されている。

こうした点をふまえ、本稿では、友をめぐる『リュシス』の一連の議論においてあらわれる、友としての人のあり方――友としての人が、何を望み、おこなう存在としてあらわれるか――を解明することを試みる。そして、これを通じて、友としての人の欲求と行為のあり

方と、知との関係性を捉えることをめざしたい。この考察により本稿は、友愛の関係を、知を愛し求める対話の営みのうちに定位することになるだろう。

1　欲求と行為の無限定性

まず、ソクラテスとリュシスとの最初の対話（207d-210d）を、その結論部（210a-d）を中心にとりあげることにしたい。ここで語られているのは、「有用で善い」（210d2）人である知者（σοφός 210d1）が人々から愛される友（φίλος）となる[4]ということである。この議論は、少なくとも表向きは、リュシスがまだ知をもたない存在であることを自覚させ、リュシスを謙虚にし（ταπεινοῦντα καὶ συστέλλοντα 210e3-4）、知を獲得することを勧めるという教導的なもの[5]にみえる。そこで、この議論の意義を積極的に評価し、そこにソクラテスのエレンコスの倫理的意義を看取しようとする解釈もある[6]。この議論からすれば、「友」としての人は、有用で善い（すぐれた）知者ということになるだろう。

しかし、この議論にあらわれる、こうした「友」（愛される人）となる知者の像は問題含みのものであるように思われる。じっさい、ここでいう知者について、ソクラテスは次のように述べている。

［引用1：210a9-c4］

何であれわれわれが思慮ある（φρόνιμος）人となる事柄にかんしては、これをギリシャ人も異国人も、男も女も、すべての人がわれわれに任せるだろう、そしてそれらの事柄においては、われわれは何であれ望む（βούλεσθαι）ことをおこなうだろうし、誰もすすんでわれわれを邪魔しはせず、むしろそれらの事柄においては、われわれ自身が自由の身（ἐλεύθερος）となって他者を支配し、それらの事柄はわれわれのもの（ἡμέτερον）となるだろう――なぜなら、われわれはそれらの事柄から利益をえるだろうから――、だが何であれわれわれが知性を獲得していない事柄にかんしては、それらの事柄について人はわれわれに、われわれが思う（δοκεῖν）ことをおこなうように任せはせず、むしろ、すべての人ができるかぎり邪魔をするだろう、他人（われわれに属さない人 ἀλλότριος）だけでなく、お父さんもお母さんも、また彼ら〔両親〕よりも親しい（οἰκεῖον）ものが何かあれば、それも〔そうするだろう〕。そして、われわれ自身はそれらの事柄においては他の人々に従うだろうし、〔それらの事柄は〕われわれにとってよそのもの（われわれに属さないもの ἀλλότριον）となるだろう。なぜなら、われわれはそれらの事柄から何ひとつ利益をえないだろうから。

ここにみられる知者（思慮ある人）の立場をまとめると、次のようになる。ある領域についての知者は、その領域の事柄から利益をえる。この意味で、知をもつ領域の事柄は自分のものとなる。ところで、知者がこうして当該領域の事柄を自分のものにできるのは、この知者

以外の人々が当該領域の事柄を知者に委ね、知者のとる行為を妨げることがなく、そのため何でも望むことをおこなうことができるからである。このことが、知者がそれ以外の人々を支配して、自らは自由の身として何でも望むことをおこなうという事態として捉えられている。ただし、知者のこうしたあり方については、注記すべき問題が2つある。

(1) 人が知者とされる基準はどこにあるのか。じつはこの基準は、他者からみてその人が知者であると思われる（ἡγήσηταί 209c4; ἡγήσηται 209d2; ὑπολαμβάνοι 210a2; ἡγούμενος 210a4; δόξωμεν αὐτῷ 210a7; cf. αἰσθάνωνται 209d5）という点にあるといえる。そうだとすれば、いま言われている「知者である」というあり方をとるためには、他の者とくらべて自分のほうがよりよく思慮する[7]のだと示してみせる（ἐνδειξαίμεθα 209e2）ことで、自分が知者であると他者から思われていればよいということになる。

(2) ではこの場合、人々から知者と思われている人は、何を望み、何をおこなうのか。知者（と思われる人）は、何であれ望むことをおこなうといわれている。とはいえ、人々が知者（と思われる人）の友となる（愛する）のは、知者が「有用で善い」（210d2）人であるからであった。だとすれば、知者と思われる人が望み、おこなうこともまた有用で善いことに限られるのだろうか。しかし、そのようには考えづらい。じっさい、たとえばペルシャ大王からみて、王子よりも自分たち（ソクラテスとリュシス）のほうが料理の支度について立派に思慮すると思われれば、料理（肉を煮るスープ）のなかに「何であれ望むものを」（209d8）投げ入れることを任せられるのは自分たちであり、大王は「この人〔王子〕にはほんのわずかのものでも投げ入れることをお許しにならないだろうが、われわれ〔ソクラテスとリュシス〕のほうには、たとえ塩を手づかみして投げ入れることを望むにしても、〔その通りに〕投げ入れることをお許しになるだろう」（209e4-6）とソクラテスは述べている。この譬えは、知者と思われる人が、かならずしも有用で善いことをおこなうとは限らないことを示唆しているといえよう[8]。これをふまえれば、知者と思われる人は、有用なこともそうでないことも、区別なく望み、おこないうるのであり、この意味で、知者と思われる人の望むことと行為には限定ないし制限がないということになると考えられる[9]。

以上のように、ここでいう「友」（他者から愛される人）としての知者は、あくまで知者と思われる人であり、有用なこともそうでないことも区別なく望み、どんな欲求も無制限に充たしうる存在である[10]。また、こうした見方にしたがえば、人が知を必要とするのは、有用なことであれそうでないことであれ、何でも自分の望むことをおこなえるようになるためだとみなされるように思われる。

次節以降では、いま確認した、欲求と行為に限定ないし制限のない、知者と思われる人という「友」の像が、いかなるかたちで修正されていき、それにより、いかにして「友」としての人の欲求と行為のあり方に限定と方向づけがなされていくのかを検討することにしたい。

2　悪しき欲求の除外

「どうすれば一方の人が他方の人の友となるのか知らない」（212a5-6）というソクラテスの無知の表明を契機に、友について問う一連の議論が以下の順序で展開されている。

議論1：愛するほうの人と愛されるほうの人のうち、どちらのほうが友となるのか（212a-213d）。

議論2：「似たものが似たものと友となる」という説とその吟味（213e-215c）。

議論3：「反対のものが反対のものと友となる」という説とその吟味（215c-216b）。

議論4：「善くも悪くもないものが善いものの友となる」という説とその吟味（216c-220e）。

議論4-1：「悪いものの存在のゆえに友となる」ことについて（217a-218c）。

議論4-2：「善いもののために友となる」ということ、および「第一の友」についての吟味（218d-220e）。

議論5：「われわれは親しいもの（οἰκεῖον）を愛する」という説とその吟味（220e-222d）。

議論2で善悪という価値の観点が導入され、以降の議論はいずれも何らかのかたちで善悪とのかかわりから論じられている。「似たものが似たものと友となる」という説は、「善い人だけが、善い人だけと、友である」（214d5-6）と捉え直されるが、善い人は自己充足的である（ἱκανὸς ... αὑτῷ 215a7）から、その点では何も必要とせず、愛することはないとされ、アポリアに陥る[11]（議論2）。一方、「反対のものが反対のものと友となる」と考えると、「善いものが悪いものと」（216b5）友となることになり、おかしい（議論3）。「似たもの」「反対のもの」それぞれの難点をうけて、議論4では「善くも悪くもないものが、悪いものの存在のゆえに、善いもののために、善いものの友となる」とされる。しかし、この説にしたがうと、「本当の意味での友」（220e3）である「第一の友」（219d1）は、「敵〔すなわち悪〕が去れば、もはやわれわれにとって友ではないらしい」（220e4-5）という問題が生じる[12]。そこで、議論5では、仮に悪が滅んでもなお存在するであろう「欲求が友愛の原因である」（221d3）とされ、われわれは欲求の対象である親しいもの（οἰκεῖον）を愛するのだとされるが（221e3-222b2）、この説も善悪の観点から吟味され、アポリアに陥るのだとされる（222b3-d8）。

ソクラテスとリュシスとの最初の議論では、知者であると他者から思われる人が、人々から愛される「友」となり、有用なこともそうでないことも区別なく望み、おこないうるということが見出された。では、このことを念頭に置いた場合、議論2以降で「友」が善悪の観点から探求されていることには、どのような意味があるといえるだろうか。

ここでまず、議論2をみてみよう。「似たものが似たものと友となる」という説は善い人だけにあてはまるとされ、悪い人にはあてはまらないとされる。なぜか。ソクラテスによれば、それは、邪悪な人は不正をおこない、敵となるからである（214b8-c3）。だからこそ、「悪い人

は善い人とも悪い人ともけっして真の友愛にはいたらない」(214d6-7) という。このことは、不正をおこなうという悪い人のあり方が、友となるにふさわしい人の欲求と行為のあり方から除外されたことを意味するといえる。

これと同様の論点は、議論4-1にもみられる。善くも悪くもないものが善いものの友となる (愛する) のは、悪いものの存在 (そのもとに現にあるということ παρουσία) のゆえであるとされる。しかし、悪いものの存在については、そのせいで善くも悪くもないものが悪いものとなってしまっているケースと、悪くなっていないケースがある (217e4-6)。この2つのケースの間の違いは、欲求のあり方にある。つまり、悪いものが現にあってもまだ悪くなっていなければ、この悪いものの「存在が、それ〔善くも悪くもないもの〕をして、善いものを欲するようにさせる」(217e7-8) が、他方、善くも悪くもないものが悪いものとなってしまうケースでは、悪いものの存在は「それ〔善くも悪くもないもの〕から、善いものへの欲求をも、善いものとの友愛〔善いものを愛すること[13]〕をも、同時に奪う」(217e8-9) のだという。この議論は、欲求する主体のあり方に着目し、善いものを欲することのない悪しき欲求主体を、友の欲求主体としてのあり方から除外するものであるといえる。

友とはいかなるものであるかが善悪の観点から検討される一連の議論は、以上のようにして、友としての人の欲求と行為のあり方から、不正な行為およびそれへの欲求、そして悪しき欲求主体としてのあり方を除外するものである。この探求には、友としての人の欲求と行為のあり方に対して、こうしたかたちで限定を加えていく効果があるといえるだろう。

3　友としての人のあり方と知

次に、友としての人の欲求と行為のあり方に対して、知はどのようにかかわるのかを考えることにしたい。そこで、「知を愛する (愛し求める) (φιλοσοφεῖν) 」ということがどのような事態として捉えられるかを検討しよう。

議論4-1では、「魂にかんしてでも、身体にかんしてでも、どんな場合でも、善くも悪くもないものが、悪いものの存在のゆえに、善いものの友である」(218b8-c2) といわれている。この主張がなされるさいに挙げられている事例は、「身体が、病気のゆえに、医術の友である」という、身体にかんするもの (217a4-b6) と、知を愛するという例 (218a2-b3) である。こうした文脈に鑑みると、知を愛するという事例が「魂にかんして」のことにあたると考えられよう[14]。

知を愛するという事態は、「善くも悪くもないものが善いものの友となる」という説に即して、次のように説明される。すなわち、知を愛するのは、すでに知者であるものでも、無知をもつことで悪い人となってしまっている人でもなく、「無知というこの悪をもっているが、まだそれによって無知にも無学にもなっておらず、むしろまだ知らないことを知らないと思っている人々」(218a6-b1) である。この意味での「善くも悪くもない人々が、知を愛する (φιλοσοφεῖν) 」(218b2) のだという。

「知を愛すること」についてのこの説明は、それ自体としては、無知を自覚するというソクラテスの態度に適っているし、また『饗宴』におけるディオティマの言葉（204a-b）に通じるプラトン的なもの[15]といえる。しかし、この説明を身体と医術の例に照らしてみると、次のような問題が浮かび上がる。

（1）まず、諸家が指摘するように、いまの説明にしたがうと、知を愛するという事態は非相互的なものとして捉えられることになる[16]。「身体は病気のゆえに医術の友である」という場合、身体は医術を「有益で善い」（217b1）ものとして求めるといえる。だがこの場合、医術のほうもまた身体を有益なものとして求めるとはいえない。この点で、身体と医術の関係は非相互的（あるいは非-互恵的）である[17]。これと同様に、知のほうが無知を自覚する人を有益なものとして求めるとはいえない。このように、知を愛するという事態を、無知を自覚する人と知との関係として捉えるかぎり、両者の関係は非相互的（非-互恵的）である[18]。

（2）身体と医術の例は、「病人が病気のゆえに〔医者の友となる〕[19]」（217a7）という事態を説明するものといえる。では、知を愛するという事態についてはどうか。いまの箇所（218a2-b3、特に218a6-b2）では、ソクラテスはこの点をどう考えるか、明確にしていない。とはいえ、「病人が病気のゆえに医者の友となる」という事例との類比関係が認められるとすれば、「無知を自覚する人が、無知のゆえに、知者の友となる」と考えられることになるだろう。じつは、議論3では、「反対のものが反対のものと友となる」例として、「すべての無知な人（知っていない人）は知者（知っている人）を求め、愛する」（215d7）といわれていた。このように考えられるとすれば、目下の説明は、まず前提として知者が存在し、その知者が無知な人に知を授けるという非相互的関係をあらわすものとして理解されることになるだろう。

はたして、知を愛するという事態は、以上のように、（1）知を求める人から知への非相互的（一方向的）な関係、あるいは（2）無知な人が、知を授ける知者を求めるという非相互的関係に尽きるのだろうか。ここで、いま友についての知を探求しているソクラテスとリュシス、メネクセノスに注意を向けたい。ソクラテスは「どうすれば一方の人が他方の人の友となるのか知らない」（212a5-6）として、友についての無知を表明していた。一方、リュシスとメネクセノスは若くして互いに友であるだけに、友を「すばやく、たやすく獲得することができ」（212a2-3）、友について心得がある（経験を積んでいる：ἔμπειρον 212a7）はずの人物として（そう仮定されて）議論に参加したものの、議論1においてすでにアポリアを経験している。しかもこのとき、議論を聞いていたリュシスは「知を愛する（愛し求める）心（φιλοσοφία）」（213d7）をみせている。このようにして、ソクラテスと少年たちはともに、無知を自覚した人として友についての知を探求する議論をおこなっているものと考えられる[20]。目下の議論におけるソクラテスと少年たちのこうした関係を念頭に置きつつ、「われわれは親しいもの（οἰκεῖον）を愛する」という説（議論5）がもつ意味を探ることにしたい。

4　対話することと友愛

議論5では、次のようにいわれる。すなわち、友愛の原因は欲求であり、欲求される対象は欲求する主体にとって欠けているもの、奪われているものであるから、「恋や友愛や欲求は親しいもの（οἰκεῖον）に向かう」（221e3-4）。したがって、「われわれは本性上親しいもの（οἰκεῖον）を愛するのが必然」（222a5-6）である、と。この説にはどのような意味があるのか。221e5-222b2の対話を検討しよう[21]。

4-1　親しい人同士の相互的関係

［引用2：221e5-7］

だとすれば、君たち2人が互いに友である（ἐστόν）ならば、君たちは本性上、何らかの仕方で互いに（君たち自身にとって ὑμῖν αὐτοῖς[22]）親しい人（οἰκεῖοι）であるのだ。

――その通りです、と彼ら2人は言った（ἐφάτην）。

リュシスとメネクセノスという人と人とが、互いに親しい人（οἰκεῖος）であるという相互性が示されている。注目すべきは、この2人が「君たち2人が…である（ἐστόν）」という両数の表現で一括りにされていること、またそんな2人の少年が互いに（自分たち自身にとって）親しい人（οἰκεῖοι）であるとされていることである。この表現は何を意味するのか。

Bolotinはこの表現に着目し、次のような興味深い指摘をおこなっている。すなわち、ここにみられるのはもはや、単一の人間に本来属するものを獲得しようとする欲求といったものではない。むしろ、ここにみられる互いの存在を求める欲求は、より大きな1つの全体に属すものであり、人はこの全体の部分にすぎないのだ、と[23]。

この指摘は参考に値するものと思われる。諸家が指摘するように、親しいもの（οἰκεῖον）への欲求は、その欲求主体から奪われている（ἀφαιρῆται 221e3）、本来その主体に属すべき親近的なものへの欲求であるといえる[24]（cf. 221d6-e5）。こうした意味での欲求は、1人の単独の人間が、その人に本来属すべき何ものかを欲するという、欲求主体としての1人の人とその欲求対象との非相互的関係として完結するものと思われるかもしれない。しかし、いまのリュシスとメネクセノスのケースでは、友である2人の人が、2人で一括りの（1つの）ものとなって、その一括りのものが互いに（自分たち自身にとって）親しい人であるとされている。上述のBolotinの指摘をヒントにすれば、ソクラテスのこの発言は次のことを示唆しているように思われる。すなわち、いまソクラテスが念頭に置いている「親しいものへの愛」としての友愛は、単一の人間がその本来性を単独で回復するといったものではなく、むしろ複数の人間がその相互性をもとに1つとなって実践すべき何ものかである、ということである。

４-２　知を愛することと対話すること

では、ここでいう親しい人同士の相互的関係は何にかかわるものなのか。いまの引用箇所につづけて、ソクラテスは次のように述べている。

［引用3：221e7-222a3］
だとすればまた――と、ぼくは言った――子どもたち、誰か一方の人が他方の人を欲するにしても恋するにしても、魂にかんしてであれ、魂の何らかの性格なり向き（τρόπος）なり型（εἶδος）なりにかんしてであれ、何らかの仕方でその人が恋されるほうの人（ἐρώμενος）にとって親しい人（οἰκεῖος）でなければ、その人は欲しているわけでもなければ、恋しているわけでも愛しているわけでもないのだろう。

親しい人への欲求、恋、友愛が、魂（あるいは魂の性格等）にかんして親しい人である場合だけに限定されており、身体その他諸々の観点への言及がない点に注意したい。この発言は、前節でみた議論4-1の「魂にかんして」（218b8）という言葉を想起させる。これをふまえると、いまいわれている「魂にかんして親しい人である」という条件も、議論4-1のケースと同様、知を愛することにかかわるものであると思われる。

この点をふまえ、引用3につづくソクラテスの発言の場面をみてみよう。われわれは本性上親しいもの（οἰκεῖον）を愛するのが必然であるとされたうえで（222a5-6）、次のようにいわれる。

［引用4：222a6-b2］
だとすれば、真正の、偽装でない恋する人（ἐραστής）は恋されるほうの子（παιδικά）によって愛されるのが必然なのだ[25]。
――すると、リュシスとメネクセノスはどうにかうなずいたが、ヒッポタレスのほうは悦びのあまり顔色を千変万化させていた。

引用2では、リュシスとメネクセノスという少年同士の友愛関係が語られていたが、ここでは恋するほうの大人と恋されるほうの少年との間の少年愛の関係が語られている。ソクラテスのこの発言は、何を意図したものなのか。ソクラテスは、親しい人同士の関係性を魂にかんしてそうである場合だけに限定していた。この関係性が「知を愛すること」にかかわるものであるとすれば、Gonzalezが指摘するように、ソクラテスは、こうした恋する人と恋される少年の関係に、彼自身と2人の少年との関係を重ね合わせようとしているように思われる[26]（この発言に自分とリュシスとの関係を重ね合わせて歓喜するヒッポタレスの思いとは裏腹に[27]）。じっさい、ソクラテスのこの発言に対して「どうにかうなずいた」という2人の少年の反応は、2人がソクラテスの発言のこうした含意を感じとっていることを示唆するも

のと思われる。この通りであるとすれば、ソクラテスと2人の少年との間でいまなされていることが、親しい人同士が1つとなってなされる何ものかを示し出していると推察することができるだろう。

それは、対話する（διαλέγεσθαι）ことにほかならない。ここで、少年たちとの対話に臨んでのソクラテスの意図、そして対話にかかわるなかでのリュシスの変化を確認してみよう。ソクラテスと少年たちとが対話することになったのは、リュシスに恋するヒッポタレスが、「人はどんな話をかわす（διαλέγεσθαι）なら［…］恋する相手の子（παιδικά）に愛されるものとなれるか」（206c2-3）をソクラテスに相談したことがきっかけであった。この相談に対してソクラテスが提案したのは、リュシスと実際に「言論をおこなう」（206c5）ことで、「彼〔リュシス〕と対話（διαλέγεσθαι）すべきことを示す（ἐπιδεικνύναι）」（206c5-6）ことである。この意味で、ここからソクラテスとリュシス（およびメネクセノス）が実際におこなっていく言論は、少年との愛にふさわしい対話を示そうとするものであるといえる。

一方、リュシスは対話を「聞くことを好む人（φιλήκοος）」（206c10）であり、ソクラテスとクテシッポスが対話をかわしているのを見ると、そこに近づいていきたいと欲する（ἐπιθυμῶν 207a6）。また、ソクラテスとリュシスとの最初の対話（207d-210d）が終わると、リュシスはソクラテスに対して、メネクセノスと対話（διαλέγεσθαι 211c1; διαλέγου 211c8）してほしいと望み（βούλομαι 211b9-c1）、そう促すが、それはその対話を「私〔リュシス〕も聞くため」（211b4）である。そして、リュシスの促しによって開始された対話は、「どうすれば一方の人が他方の人の友となるのか知らない」（212a5-6）というソクラテスの無知の表明をもとに、友についての知を求めるものとなる[28]。そして、ソクラテスとメネクセノスとの対話がアポリアに陥ると（議論1）、対話の傍聴者であったはずのリュシスが「思わず」（213d3）口をはさむ。ソクラテスはここにリュシスの「知を愛する（愛し求める）心」（213d7）を看取し、それに喜び（ἡσθεὶς 213d7）、リュシスに対して議論を投げかける（213d2-e1）。こうして、リュシスは対話の傍聴者から、あらためて知を求める対話者として対話に参加することになった[29]。両者のこのやりとりには、友についての知を探求すべく対話することを互いに求め合う相互関係があらわれているように思われる。このように、当対話篇では、(1) リュシスは対話を聞くことを好む人として対話に引き寄せられ、(2) そしてリュシスが新たな対話（ソクラテスとメネクセノスとの）を望み、促すことで、ソクラテスの無知の表明によって始められる知の探求が対話というかたちで引き起こされ、(3) さらにこの対話がリュシスの「知を愛する（愛し求める）心」を呼び起こし、リュシスは知を求め対話する人へと変容しているのである。

以上をふまえると、ソクラテスとリュシスは、友についての知を求めて、互いに対話することを求め合い、それを一連の議論のなかで、メネクセノスをも巻き込みつつ実践しているのだと捉えることができる。ソクラテスが念頭に置く「親しいものへの愛」としての友愛が、複数の人間がその相互性をもとに1つになって実践すべき何ものかであるとすれば、またソクラテス

が少年たちとの一連の議論の実践を通じて、少年との愛にふさわしい対話を示し出そうとしているのだとすれば、「親しいものへの愛」としての友愛は、知を愛し、対話することを互いに求め合う人々が、対話をおこなって知を探求するという事態にほかならないということになる。そしてこの場合、友としての人は、知への愛をもとに対話することを欲し、おこなう存在として捉えられる。ソクラテスはこのことを、言葉で述べる（εἰπεῖν 206c4）かたちで規定するのではなく、少年たちとの対話を実践するなかで示したのだといえるだろう[30]。

結語

本稿のここまでの考察をまとめよう。本稿では、友としての人の欲求と行為のあり方、またそれと知との関係を検討してきた。ソクラテスとリュシスとの最初の対話（207d-210d）において暗示されるのは、知者であると思われることによって、有用なこともそうでないことも区別なく望み、どんな欲求も無制限に充たしうる人としての「友」（愛される人）であった。これに対して、以降の議論では、不正を望み、おこないうる、悪しき欲求主体としての人のあり方を除外するかたちで、友としての人のあり方に限定が加えられている。そして、友としての人は、知を愛し求めることに基づいて、対話を望み、おこなう人として捉えられる。このことは、ソクラテスと少年たちとの対話の実践のなかで示し出されている。ここまでの考察は、以上のことを見届けてきた。知を愛し求めることは、知（あるいは知者）と無知な人との間の一方向的な関係として捉えられるよりもむしろ、知を愛し求める人同士の相互性のうちに定位される。「恋や友愛や欲求は親しいもの（οἰκεῖον）に向かう」（221e3-4）というソクラテスの言葉が示しているのは、このことであると思われる。

参考文献

Bolotin, D.（1979）, *Plato's Dialogue on Friendship: An Interpretation of the Lysis, with a New Translation*, Ithaca/ London: Cornell University Press.

Bordt, M.（1998）, *Platon: Lysis*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Burnet, J.（1903）, *Platonis Opera*, vol. III, Oxford Classical Texts, Oxford: Oxford University Press.

Gonzalez, F. J.（1995）, "Plato's *Lysis*: An Enactment of Philosophical Kinship", *Ancient Philosophy* 15, pp. 69-90.

Guthrie, W. C. K.（1975）, *A History of Greek Philosophy*, vol. IV, Cambridge: Cambridge University Press.

波多野知子（2005）,「プラトン『リュシス』篇の問いと例示（エピデイクシス）――「何であるか」と「どのようにするか」との間で」,『西洋古典学研究』53, pp. 80-91.

Kahn, C. H.（1996）, *Plato and the Socratic Dialogue*, Cambridge/ New York: Cambridge University Press.

Levin, D. N.（1971）, "Some Observations Concerning Plato's *Lysis*", in Anton, J. P., Kustas, G. L.（eds.）, *Essays in Ancient Greek Philosophy*, Albany/ New York: State University of New York Press, pp. 236-258.

Mackenzie, M. M.（1988）, "Impasse and Explanation: from the *Lysis* to the *Phaedo*", *Archiv für Geschichte der Philosophie* 70, pp. 15-45.

宮崎文典（2014),「プラトン『リュシス』におけるソクラテスと若者たち――ソフィストの立場とソクラテスの対話との対比」,『政治哲学』17, pp. 99-113.

中村一彦（1995),「プラトン『リュシス』研究：訳と注」,『人文・自然科学研究（釧路公立大学紀要）』7, pp. 39-81.

Nichols, M. P.（2009）, *Socrates on Friendship and Community: Reflection on Plato's Symposium, Phaedrus, and Lysis*, Cambridge: Cambridge University Press.

Penner, T. and Rowe, C.（2005）, *Plato's Lysis*, Cambridge: Cambridge University Press.

Price, A. W.（1989）, "Friendship and Desire in the *Lysis*", in his *Love and Friendship in Plato and Aristotle*, Oxford: Oxford University Press, pp. 1-14.

Renaud, F.（2002）, "Humbling as Upbringing: The Ethical Dimension of the Elenchus in the *Lysis*", in Scott, G. A.（ed.）, *Does Socrates Have a Method?: Rethinking the Elenchus in Plato's Dialogues and Beyond*, Pennsylvania: Pennsylvania State University Press, pp. 183-198.

Robinson, D. B.（1986）, "Plato's *Lysis*: The Structural Problem", *Illinois Classical Studies* 11, pp. 63-83.

Robinson, R.（1953）, *Plato's Earlier Dialectic*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press.

Rudebusch, G.（2004）, "True Love Is Requited: The Argument of *Lysis* 221d-222a", *Ancient Philosophy* 24, pp. 67-80.

Schultz, A.-M.（2013）, *Plato's Socrates as Narrator: A Philosophical Muse*, Lanham: Lexington Books.

Sedley, D.（1989）, "Is the *Lysis* a dialogue of definition?", *Phronesis* 34, pp. 107-108.

Smyth, H. W.（1920）, *Greek Grammar*, Harvard: Harvard University Press.

田中伸司（1991),「プラトン『リュシス』篇の構造」,『北海道大學文學部紀要』40（1）, pp. 1-64.

土橋茂樹（2003),「プラトン『リュシス』篇解釈の一視点」,『中央大学文学部紀要：哲学』197, pp. 1-15.

注

1） 以下、『リュシス』のギリシャ語テクストとしてはBurnet校訂によるOxford Classical Text（Burnet（1903））を用いる。訳文はおもに中村（1995）、Bolotin（1979）、Penner and Rowe（2005）等を参考にして筆者が訳したものである。また、引用文中の〔 〕内は引用者による文意の補足である。

2） Guthrie（1975: 144）がこのように理解している。また、Robinson, R.（1953: 49）は、当対話篇には「友愛とは何か」という問いと友愛の条件の問いとの間の混同があるとしている。

3） Cf. Sedley（1989: 107）.

4） 「では、何であれわれわれが有益でない事柄において、われわれは誰かの友（φίλος）となり、誰かがわれわれを愛する（φιλεῖν）だろうか」（210c5-6）、「だとすれば、君〔リュシス〕が知者となれば、君、すべての人が君の友（φίλος）と［…］なるだろう」（210d1-2）とソクラテスは述べている。これらの発言では、誰かから愛されるほうの人と、誰かを愛するほうの人の両方がいずれも「友」とされている。のちの議論（212a-213d）では、愛するほうの人が友となるのか、愛されるほうの人が友となるのか、という問題が、φίλος（φίλον）という語の指示対象の多様性をもとに問われるが（この語には「愛される人／もの」をさす場合、「愛する人／もの」をさす場合、また「その両方」をさす場合がある。この点については、中村（1995）; Mackenzie（1988: 26-31）; Price（1989: 3-4）等を参照）、ひとまず目下の議論（210a-d）では、人々から愛される知者、および知者を愛する人々のいずれについても「友」と呼びうるという前提で語られているものと理解することができる。

5） Cf. Kahn（1996: 282）.

6） Renaud（2002: 187-194）の解釈がこれにあたる。

7）　目下の議論で述べられている、ある人Aが「賢い（知者である σοφός）」「思慮ある（φρόνιμος）」というあり方については、AがBよりよく思慮するとB（あるいは第三者C）に思われるというかたちで、AとBとの比較にもとづいて述べられている（209c4-5, 209d2-3, 210a7）。

8）　料理の譬えとともに、ペルシャ大王の王子が眼を病んだ場合、医者と思われさえすれば、王子の眼に灰（τέφρας 210a4）をかけることさえ妨げられないという譬えが挙げられている（209e6-210a4）。プリュギア人は実際にτέφραを眼病治療に用いていたという報告もあるようだが（これについてはPenner and Rowe（2005: 23 n. 31）を参照）、この譬えもまた、料理に大量の塩を入れる例と同様、有用でない（有害でさえある）ことも望めばおこないうるという意味で語られているとみるのが妥当だろう。この点についてはBolotin（1979: 94-95）を参照。

9）　ソクラテスとリュシスとの最初の対話（207d-210d）は、両親がリュシスの幸福を望むなら、両親はリュシスが何であれ欲することをおこなうのを妨げない（207e7）のではないか、という問いかけから始まり、「何でも欲する（望む）ことをおこなう」ことが幸福であるという見方が前提となっているように見受けられる。こうした見方はたとえば『ゴルギアス』におけるポロスやカリクレスの見方（cf. 466b-c, 468e, 491e-492c）を想起させるが、ソクラテス自身はここでこうした幸福観を自らの見解として認めているとは考えがたい（この点については宮崎（2014）を参照）。むしろ、Renaud（2002: 190, 196）が指摘するように、この議論では少年であるリュシスに合わせた対人論法（ad hominem）としてこうした見方が前提とされていると捉えられよう。

10）　プラトンは当該議論で、知者と思われることで他者を支配し、何であれ自分の望むことをおこなうというこの立場を、当時のアテナイの若者たちが理想として志向しうる（あるいは、志向しがちな）立場として提示しているのではないかと思われる。また、この問題にかんしては、このような意味で他者を支配する力を授けるソフィストあるいは弁論術教師というものが関連してくるように思われる（たとえば、『ゴルギアス』448e-459cで示される、弁論術教師としてのゴルギアスを参照）。こうした点については、宮崎（2014）を参照。

11）「善い人は友になりえない」という見解をプラトン自身の実際の見解とみるか否かをめぐる、von ArnimとPohlenzの論争については、Bolotin（1979: 201-225）を参照。

12）「善くも悪くもないものが、悪いもののゆえに、善いもののために、善いものの友となる」という説がアポリアに陥ったのは、この議論においては善がただ悪を除去するための有用性という意味でのみ捉えられていることによる。じっさい、ソクラテスは次のように述べている。悪が存在するがゆえに善いものを愛するのであるかぎり、善は悪という病気をいやす薬（φάρμακον 220d3）のようなものであり、病気がなければ必要とされないし（220d2-4）、「自分自身のためにはいかなる有用性（χρεία）ももたない」（220d6-7）。そして、こうしたあり方が善の本性である（πέφυκέ 220d5）という。

220e4で、第一の友は「敵のために（ἕνεκα）」友であるといわれているが、この表現も、善が当該議論ではこのような意味で述べられているという点をふまえて理解されるべきだろう。議論4-1および4-2では、διάという語とἕνεκαという語が鍵語として用いられている。一般的にはこの2つの語は交換不可能ではないが、当該議論ではδιάは「悪いもののゆえに」、ἕνεκαは「善いもののために」という意味で、それぞれ区別して用いられている。ところが、いまの箇所では「敵〔悪〕のために（ἕνεκα）」と述べられている。これは一見それまでの用法にそぐわないため、プラトンはここでδιάとἕνεκαの混同を犯しているのだと評されることがある（たとえばGuthrie（1975: 149）。また、中村（1995: 76-77 n. 60）は、プラトンはδιά τιという条件を消去するために、それまでの議論での用法に反する表現をあえて用いていると解釈する）。しかし、この表現については、次のよ

うに理解することができるように思われる。すなわち、第一の友は、何かそれ自体とは別の友（愛されるもの）のために愛されるというようなかたちで、「もはや他の友に遡りはしない」（219c6-7）。とはいえ、それは友であるかぎり、何かのために友である（cf. 219c2-3）。しかしそれはそれ自体のために愛されるわけではない（「自分自身のためにはいかなる有用性ももたない」（220d6-7）から）。したがって、第一の友は「敵のために」、つまり「敵である悪の除去のために」友である（愛される）といわざるをえず、敵が去れば、第一の友は友でなくなってしまう、ということである。このように理解する場合、「敵のために」という表現における ἕνεκα は、あくまでそれまでの議論での用法に沿うものとして捉えられることになろう。同様の見解として、Penner and Rowe（2005: 134）を参照。

13） 217e9 の τῆς φιλίας τοῦ ἀγαθοῦ は、文脈、また直前の ἐπιθυμίας と併記されていることからして、「善いものを愛すること」という意味であろう。これを「善への愛情」と訳す中村（1995: 58）を参照。

14） この点については Bolotin（1979: 150）を参照。

15） Cf. Guthrie（1975: 149）.

16） Gonzalez（1995: 79）; Nichols（2009: 178）等を参照。また、Kahn（1996: 286）もこの説明を非対称的（asymmetrical）なものと評している。

17） 同様の指摘として Robinson, D. B.（1986: 74）を参照。

18） 議論 1 では、善（有益性）という観点を含まずに、知恵（σοφία 212d8）は知を愛する人を愛し返さないとされる（212d5-8）。

19） 217a6 では「健康であれば、誰も健康のゆえに医者と友でありはしない」といわれ、つづけて 217a7 で「むしろ、思うに、病人が病気のゆえに〔医者の友である〕」といわれている。「身体（善くも悪くもないもの）が、病気（悪いもの）の存在のゆえに、医術（善いもの）の友である」という図式は、こうした「病人」と「医者」の関係から引き出されたものである。

20） この点については宮崎（2014）を参照。

21） 以下、本稿では、221e5-222b2 の対話をてがかりにして、友愛を「知を愛し求めて対話すること」と結びつける解釈を提示することになるが、友愛と対話の結びつきは、次のような点からも捉えられうるものと思われる。すなわち、ソクラテスは友についての探求を始めるにあたって、「だが私のほうは〔友の〕獲得には程遠く、したがってどうすれば一方の人が他方の人の友となるのか知らないほどなのだ」（212a4-6）と述べていたが、対話の最後には、「われわれ〔ソクラテスとリュシス、メネクセノス〕は互いに友であると思っている」（223b6）と述べている、という点である。このことは、対話によって知を探求し合う者同士が友として捉えられることを示唆しているように思われる。この点について、詳しくは宮崎（2014）の第 3 節を参照。

22） 再帰代名詞で相互性をあらわす用法になっている（cf. Smyth（1920: 306 §1231-1232））。Bolotin（1979: 183）は、ここであえて再帰代名詞が用いられている点に着目し、ソクラテスはこの表現によって、2 人の友がある意味で 1 つになることを示唆しているのだ、と解釈している。直前に両数の表現（ἐστόν）が用いられている点を重視すれば、参考に値する解釈であると思われる。

23） Bolotin（1979: 183）. ただし、こうした指摘をおこなっているにもかかわらず、Bolotin 自身の最終的な解釈は、真の友愛を「自己自身の善への愛」、すなわち「自己の魂の徳への愛」と捉えるというものである（Bolotin（1979: 192-193））。Bolotin はこのようにして、友愛を単一の人間とその人に本来属すべき善との関係に還元する解釈をとっている。

24） Cf. Gonzalez（1995: 82）; Levin（1971: 246）; 土橋（2003: 12）; Bordt（1998: 222-223）.

25） 「真正の愛は、愛し返されるものである」ということが示される、221d からこの箇所にかけて

の議論の分析と、「愛し返される」ということの擁護として、Rudebusch（2004）を参照。

26） Cf. Gonzalez（1995: 84-86）.

27） Penner and Rowe（2005: 167）は222a3のεἶδοςについて、ソクラテスは‘魂の型’（τῆς ψυχῆς ... εἶδος 222a3）という意味で述べているが、ヒッポタレスは‘（身体の）姿かたち’（εἶδος）の意味で理解しているのだと解釈している。少年たちがとった反応とヒッポタレスがとった反応との違い（222b1-2）は、ソクラテスおよび少年たちとヒッポタレスとの間の理解の違いを示唆しているように思われるので（cf. 田中（1991: 52））、参考に値する解釈と思われる。

28） 本稿第1節でみたように、ソクラテスとリュシスとの最初の対話（207d-210d）は表向きは知の獲得の勧めとなっている。とはいえそれは、ソクラテスが無知を自覚した者として対話し、知を探求するというものにはなっていない。

29） リュシスがここで能動的な対話参加者になっているとする、Schultz（2013: 25）の指摘を参照。

30） 同様に、友愛が知の探求の実践において示されているとする解釈として、Gonzalez（1995: 86-87）; 波多野（2005: 88）を参照。

ENGLISH SUMMARY

Friendship and Conversation: The Person as Friend in Plato's *Lysis*

MIYAZAKI Fuminori

This paper examines the meaning of the person as friend (φίλος) in Plato's *Lysis,* especially with regard to the person's desires and actions, and how these relate to wisdom. The person as friend who is referred to in the first conversation between Socrates and Lysis (207d-210d) is someone who may, by virtue of being regarded as wise, indiscriminately desire both beneficial things and harmful ones, and infinitely satisfy every desire. In the subsequent arguments in this dialogue, however, the character of the person as friend is modified: harmful desires are excluded from the desires that such a person should have. Then, the concept of the person as friend is grasped as a person who wishes to have a conversation and performs it on the ground of loving and seeking the wisdom he lacks. This characterization is implied in the practice of the conversations between Socrates and the two young boys, Lysis and Menexenus, depicted in this dialogue. We then see the love of wisdom (φιλοσοφία) in the reciprocity among people who acknowledge their own ignorance and seek wisdom.

Key Words: Socrates, Plato, *Lysis*, friendship, conversation